



筑紫女学園大学リポジト

On the Role of Logic in Jaina Canonical Literature

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 智行, UNO, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/415

ジャイナ教論理学の萌芽 — 論理の担う役割について —*

宇野智行

On the Role of Logic in Jaina Canonical Literature

Tomoyuki UNO

0. 序

仏教僧シャーントラクシタ (8CE.) の『タットヴァ・サングラハ』には、ジャイナ教論理学者パートラスヴァーミン (Pātrasvāmin) の推理説が紹介され、ジャイナ教の証因の一条件説とともに内遍充 (antarvyāpti) による論理学が批判対象となっている。また、ジャイナ学僧シッダセーナ・ディヴァーカラの『ニャーヤーヴァターラ』にも 'antarvyāpti' というタームによって推理論が展開されており、ジャイナ教における論理学は、「内遍充」という概念によって特徴づけられるものとして一般に理解されていると考えてよいであろう。しかしながら、このようなジャイナ教の論理的思考は、パートラスヴァーミン、シッダセーナなどの論理学者によって開始されたわけではない。もちろん両者はジャイナ教において初めて体系的論理学の完成を試みたということと言えるが、その萌芽は彼ら以前から存在していたと言わなければならない。

事実、ジャイナ教聖典には、'anumāṇa' (「推理」) 'heu' (「証因」) などの語が散見され、既に聖典の時代から論理的思考についての考察がなされていた。さらに、その聖典に対する注釈者たち (バドラパーフ、ジナバドラなど) も聖典の論理的思考を発展させており、パートラスヴァーミンやシッダセーナ以前に論理学の発展があったことは明白である。しかしながら、ジャイナ教聖典やその注釈文献において、論理的思考がどのように導入され、どのような役割を担っていたのかは未だ明白ではない。インド論理学の嚆矢となったニャーヤ学派は、明らかに他学派との「問答」のためにその論理学を発展させてきた。また、各学派が認める形而上学的存在の論証を目的として、論理学を駆使する潮流は、サーンキヤ学派や仏教論理学派によってリードされてきた。本稿の目的は、ジャイナ教白衣派聖典とその注釈文献を中心に、ジャイナ教における推理論の萌芽を探り、ジャイナ教において論理的思考がどのような意図で導入され、いかなる役割を持っていたかを明らかにすることにある。特に、バドラパーフによる聖典に対する韻文注釈『ニルユ

クティ』を材料として、ジャイナ教において論理学が果たした役割について考察することとした。

1. 知 (ñāṇa) と推理

ジャイナ教における認識論の伝統を鑑みるならば、聖典期には五知 (感官知・聖典知・直観知・他心知・独存知) という分類の元に「知」(Pkt. : ñāṇa / Skt. : jñāna) というタームによって認識論の説明が為されていたことは明らかである。そして、この「知」は単に認識論のみならず、ジャイナ教という宗教体系の根幹をなす概念と捉えられている。このことは、次の『ウッタラーデイヤヤナ・スートラ』の記述に明らかである。

ガウタマ「また、[パールシュヴァナータ先生、マハーヴィーラ先生からは] 次のように、解脱の正しい達成手段が定められています。[それは] 究極的には、知 (ñāṇa) ・見 (daṃsaṇa) ・行 (caritta) に他ならないのです。」¹

この記述では、知が解脱というジャイナ教の最終目標へ至る手段として理解されていることが示されている。後にウマースヴァーティが「正しい見 (darśana)、正しい知 (jñāna)、正しい行 (cāritra) が解脱へ至る道である」²と定義するように、ジャイナ教では、教義に対する正しい信仰 (見) を持ち、正しく理解し (知)、正しい行いをする (行) ことにより解脱が達成されると考えられている。このように、知という概念は、ジャイナ教の解脱論に直結するものであり、聖典の段階から知を宗教体系に密接に関わる重要概念と捉えていたのである。さらに、『ウッタラーデイヤヤナ・スートラ』は次のように言う。

知・見・行そして同様に苦行 (tavo)、これら [解脱へ至る] 道に依拠するジーヴァは善き所へ赴く。このうち知は五種である。聖典 [知] (sua[-ñāṇa])、感官 [知] (ābhiñibohiya [-ñāṇa])、直観知 (ohiyañāṇa)、他心知 (mañāṇāṇa)、独存 [知] (kevala[-ñāṇa]) である。³

ここでは、知とは五知 (jñānapañcaka) であることが明確に示されている。つまり聖典の段階では「知」を、聖典知、感官知、直観知、他心知、独存知の五種に分類し、これらを解脱という目標にとって必要なものと捉えている。以上のように、知は解脱の原因と理解されていることから、聖典期には知の考察、特に五知説の考察にその労力が注がれているのである。

ジャイナ教認識論の発展は、この「知」と呼ばれる認識型を他学派の影響を受けて「ブラマーナ (認識根拠)」(pramāṇa) というタームの元に再構築することを最大の命題としていた。つまり、ジャイナ教認識論は、伝統的な認識論である五知説をニャーヤ学派や仏教論理学派によって主導されたブラマーナ論の潮流に合致させることによって発展したと言ってよい。

そして、既に Malvania[1949 : 62-63]、宇野 (惇) [1965 : 171] に指摘されているように、このような「知」「ブラマーナ」という二つの認識論体系は、相互に独立して発展したと考えてよい。聖典に散見される「ブラマーナ」に相当する語 'pamāṇa' は、「知」(ñāṇa) とは異なる文脈で登場しており、「知」の伝統とは完全に独立した思考と見なすことが出来る。このことは、特に知の伝統と「推理」(aṇumāṇa) という認識型の関連を精査することにより明らかである。例えば、『バ

ガヴァティー・ストラ』や『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストラ』は「プラマーナ（認識根拠）」を次のように分類している。

ではこの認識根拠とは何か。認識根拠には4種が定められている。すなわち、知覚（paccakkha）、推理（añumāṇa）、類推（ovamma）、証言（āgama）である。⁴

ではこの知という属性に関わる認識根拠（ñāṇaguṇapamāṇa）とは何か。知という属性に関わる認識根拠には4種が定められている。すなわち、知覚、推理、類推、証言である。⁵

『バガヴァティー・ストラ』における認識根拠の四分類は他学派特にニャーヤ学派のプラマーナ分類⁶—知覚（pratyakṣa）、推理（anumāna）、類推（upamāna）証言（āgama）—と完全に合致している。また、『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストラ』も全く同じ分類を提示している。このうち、知覚は五知のうちの感官知に対応し⁷、証言は聖典知に対応している。すなわち、6世紀の聖典注釈者ジナバドラは感官に基づく知（感官知）を世間的直接知と呼び、他学派の知覚との同一視を企図した⁸。さらに、アカランカ以降のジャイナ教学僧たちは、聖典知を証言に配当し、五知説をプラマーナ論に吸収している⁹。つまり、6世紀以降の論師たちは、ジャイナ教に特有な伝統的五知説の感官知と聖典知を、他学派の提唱する知覚および証言に対応させて「プラマーナ」という術語の元に認識論を再構成したのである。

ところが、推理と類推の二つは五知説にその原型を求めることはできない。確かにウマースヴァーティは伝統的認識論における感官知（matijñāna / ābhiniḥbodhikajñāna）を拡充することによって、その中に推理とおぼしき認識型を含み持たせる努力をしている¹⁰。しかしながら、聖典においては感官知の中には推理的要素は垣間みることは出来ず、推理という認識根拠は全く他学派のものを借用していると言わざるを得ない。すなわち、推理という認識型は「知」を中心とする伝統的認識論から発展したものではなく、既に聖典の時代から他学派の影響を受けてジャイナ教哲学に取り込まれたものと考えて差し支えないであろう。

また、次のような『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストラ』の推理の分類もこのことを示唆している。

ではその推理とは何か。推理には3種あると定められている。すなわち、pūrvavaṃ, sesavaṃ, diṭṭhasāhamavaṃとである。¹¹

インド初期の推理論では、推理を（1）pūrvavat、（2）śeṣavat、（3）sāmānyato dṛṣṭamの3種に分類することは良く知られているが、上記のジャイナ聖典の記述もこの3分類に非常に類似したものと言えよう。この3分類は、医学書『チャラカ・サンヒター』、サーンキヤ学派の論書『シャシュティ・タントラ』、ニャーヤ学派の根本経典『ニャーヤ・ストラ』、仏教徒による『方便心論』などに現れており、そのクロノロジーは定かではないにしても¹²、ジャイナ教聖典が同じ様な論理に関する思想を他学派から拝借したと考えられる。つまり、推理論は、ジャイナ教の最初期の認識論である五知説とは完全に独立した形で、聖典に導入されたのである。

また、この三種の推理を説く目的については、他学派の意図は明瞭である。『チャラカ・サンヒター』においてはこのように分類される推理形式は、すべて医者同士の「問答」を目的として

説かれている¹³。『ニヤーヤ・スートラ』における推理にしても、解脱 (niḥśreyasa) を目的としてその原因たる真理認識の対象と見なされている¹⁴。また、『シャシュティ・タントラ』でも、解脱の原因の知の一種として推理が考えられ、サーンキヤ学派が認める原理 (プルシャなど) を論証しようという意図が窺える。

一方、『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』では、上記の他学派のような推理を説く目的は何ら記述されていない。同書では、淡々と3種の推理の下位分類が述べられ、また多くの推理の例が列挙されるに過ぎない。その例の殆どは、日常的な判断や生活の知恵に相当するものであり、それらを収集し分類することだけが意図されているようである¹⁵。つまり、他学派とは異なり、ジャイナ教聖典では推理という概念には「解脱」や「問答」などという目的は設定されておらず、その分類や説明のみに他学派からの影響があるとしか言えない。

上記のように、ジャイナ教聖典では、ジャイナ教独自の「知」という概念によりその認識論を構築することから出発し、徐々に他学派の影響を受けて「プラマーナの4分類」を取り込んだ。また、推理に関しては、解脱の原因たる「知」には含まれず、聖典においてはその目的や役割は極めてあいまいなままなのである。

2. 論理的思考が果たす役割

以上、聖典段階では推理はジャイナ教の解脱を最終目標とする宗教体系とは密接な関連を持たないことが明らかとなったが、推理そのものは一体どのような目的を持ってジャイナ教哲学に組み入れられたのだろうか。聖典そのものでは不明瞭であるが、その注釈文献においては論理に関わる思考が飛躍的に発展する。まず『ニルユクティ』作者であるバドラバーフ¹⁶は、『アーヴァシユヤカ・ニルユクティ』において次のように言う。

『アーヴァシユヤカ』『ダシャヴァイカーリカ』『ウッタラ・アディヤヤナ』『アーチャーラ』について、同じように『スートラクリタ』また『ダシャーシュルタスカンダ』『カルパ』、また最高に完全なる『ヴィヤヴァハーラ』、『スールヤプラジュニャプティ』そして『リシバーシタ』に関して、私はジナの教えに従って『ニルユクティ』を述べよう。例示・証因・根拠の言葉の集合である『ニルユクティ』を簡潔に述べよう。¹⁷

このバドラバーフの言葉は、彼自身の『ニルユクティ』という聖典注釈を作成するにあたり、その対象となる聖典のリストとして有名なものである。しかし、ここでは、「例示」(āharaṇa)「証因」(heu)「根拠」(kāraṇa) と呼ばれる推理に関連する要素を示す言葉に注目したい。彼の言葉によれば、彼の『ニルユクティ』は「例示、証因、根拠の言葉の集合」であり、論理的思考の集合と捉えていることが理解できる。すなわち、聖典 (ジナの教え) を論理を尽くして説明する手段として、例示以下の方法が採られるのである。

当該箇所においてバドラバーフは、これらそれぞれについて何の説明も加えないが、『ダシャヴァイカーリカ・ニルユクティ』では次のように「例示」の同義語を列挙する。

[対象が] 知られる場 (ṇāya)、例示 (udāharaṇa)、実例 (dīṭṭhaṃta)、比喩 (uvamā) 同じ

ように提示 (nidarisaṇa)、これらは同義語である。またそれは2種であり、さらに[それぞれ] 4種であると理解すべきである。¹⁸

この記述によれば、バドラバーフにとっての「例示」という語は、他学派特にニヤーヤ学派の言う論証式の一支分「喩例」(udāharaṇa)¹⁹に比べて極めて広い意味を持つ。すなわち、対象が知られる場(jñāta)とは、いわば煙から火を推理する場合の喩例、火を持つカマドという場そのものを指す²⁰。また、実例(dr̥ṣṭānta)は例として挙げられる対象に他ならない。比喩(upamā)は、話題となっている対象を別の事例を挙げて例えることそのものであり、例を提示することによる類推とも理解されるものである²¹。提示(nidarśana)とは、例となるものを示す作用のことを指す。つまり、バドラバーフの言う'udāharaṇa'とは、単に論証式の喩例支のみを意味するだけでなく、例示する作用、例示する場、例示の対象、例示する話など、「例えること」に関わる大きな概念と考えてよい。

バドラバーフが言う通り、ジャイナ教の聖典注釈には、数多くの比喩や例え話が含まれている。『ニルユクティ』のみならず、それ以降の注釈は、様々な寓話、古譚、伝説などがかなりの部分を占めている。それらの例え話は、聖典注釈作者たちによって民間伝承から取り入れられ、ジャイナ教の教義を他者に理解させるために利用された。つまり、注釈者たちは一般的な、宗教色を持たない物語の叙述によって説法に肉付けをし、その教義を例証によって示したのである²²。このようにバドラバーフが言う'udāharaṇa'は、聖典注釈に見られる例え話などをも含め、例えられるべき対象(聖典に説かれる教義内容)を理解できるよう一般的なものに例えることを含む概念と考えてよいであろう。

さらにバドラバーフは「証因」を次のように簡潔に説明する。

証因には4種ある。そしてこ[の証因]によって[主張の対象が]論証される。²³

この記述によれば、'heu'とは純粹に論証に関わる概念と考えられよう。『ニルユクティ』に対する注釈者ハリバドラは「そしてこの証因は、論証されるべきものとの不可離の関係を力を通じて(sādhyāvinābhāvabalena)、対象すなわち主張する対象(pratijñārtha)を論証する、すなわち実現するもしくは理解せしめるのである。」²⁴と解釈しており、ここに言う'heu'が論証されるべき対象と不可離の関係を持ち、それを理解せしめるもの(gamaka)であることを示唆している。

上記のようにバドラバーフは『ダシャヴァイカーリカ・ニルユクティ』において例示と証因を簡潔に説明したのち、それぞれの分類(例示2種および証因4種、さらにそれぞれにも下位区分あり)に取りかかる。彼は同書において、五支、十支などの論証式のパターンを提示しており²⁵、上記の例示、証因は共にこれらの論証式の支分の一部を構成している。ここではバドラバーフによるこれらの論証式支分それぞれの説明は割愛するが、彼が提示する五支の論証式の例を以下に紹介しよう²⁶。

【主張：painnā】不殺生などの善きダルマは、最高の吉祥なるものである。

【証因：heu】神々でさえも、この善きダルマを備えた人に敬礼するから。

【喩例：ditṭhamta】阿羅漢や出家者、ジナの弟子たちが神々によって敬礼されているように。

【適合：uvasamhara】神々が救世主に敬礼するように、世間の王たちも善きダルマを備えた人に敬礼する。

【結論：nigamaṇa】ゆえに、善きダルマは、最高の吉祥なるものである。

この五支からなる論証式は、ニヤーヤ学派が提示する五支と類似しているが、ここではその論理的整合性ではなく、論証の内容に注目したい。このバドラバーフが提示する論証式は、彼が論理学を駆使する意図をそのまま表したものとと言える。すなわち、当該の『ニルユクティ』の注釈対象である聖典『ダシャヴァイカーリカ・スートラ』の冒頭は次の通りである。

不殺生、抑制、苦行というダルマは最高の吉祥なるものである。神々でさえも常にこれらのダルマに心を向ける人に敬礼する。²⁷

この聖典の言葉は、そのままバドラバーフの提示する論証式の主張支分と証因支分に他ならない。つまり、彼は『ダシャヴァイカーリカ・スートラ』に説かれている内容について、論証式を通じて、他者に知らしめることを意図しているのである。ジャイナ教にとって重要な概念である「不殺生、抑制、苦行」は、そこに最高の価値が置かれることは当然のことであろう。ところが、このような内容は極めてドグマティックなものであり一般に理解されることは難しい。バドラバーフはこのような聖典に説かれた内容を様々な論証式を駆使して、聖典を読む者に理解せしめることを目的としているのである。彼が自己の聖典注釈を「例示」「証因」「根拠」の言葉の集合と述べたことは、まさしくこのような論証式を提示していることと符合する。すなわち、バドラバーフにとっての「例示」「証因」などという論理的要素は、聖典の説明を目的として導入されたのである。

3. 支分の多様性・任意性

バドラバーフの述べる「例示」「証因」は、聖典に説かれた内容を説明するために駆使される論理的要素であることが明らかとなったが、第3番目の「根拠」とは一体どのようなものであろうか。バドラバーフ自身はこの根拠という概念については、何ら説明していない。そこで、彼の『ニルユクティ』を補完説明する注釈文献『ヴィシエーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』の作者であるジナバドラの解釈を紹介しよう。

根拠 (kāraṇa) とは、別の箇所では証因のことに他ならない。しかしながら、ここでは証因は [直前に] 直接述べられているので、根拠とは「説明付け一般」のことである。たとえば、

【主張】完成者 (siddha) は比類なき楽を持つ。

【根拠】なぜなら、彼は知の阻害のないことに秀でているから。

そして、[ここでは]比類のない楽を主張しているのに、こ[の論証]には喩例が存在しない。しかし最高の楽を持つムニたちには、卓越した知の非阻害があることが、経験されている。まさにこの独存知および物質からの捨離の非阻害に秀でているという点に基づいて、肯定的共在 (anvaya) がなくとも、完成者たちには比類のない楽があることの説明付けが理解

されるのである。²⁸

ジナバドラーは‘kāraṇa’を「説明付け一般」(upapattimātra)と理解し、証因・喩例の両者を伴う一般的な論証式とは考えない。彼はこの論証を極めて特殊なものと考えているのであろう。ジナバドラーは仏教学僧ディグナーガの論理学に大きな影響を受けており、ディグナーガの提唱する証因の三条件説や三支分からなる論証式もほぼ承認していると言ってよい²⁹。上記の論証においては、論証対象である「完成者」以外に、「最高の楽」を持つ者は存在するにしても、「比類なき楽」を持つものは居ない。文字通り「類のない」ものの論証であるから、同類例を提示することは不可能となる。したがって、ここに挙げている同類例を提示できない論証は、ジナバドラーにとってはイレギュラーな論証と思われる。

一方、バドラーバーフはこのような「例示」を伴わない「根拠」のみを示す論証をどのように考えているのであろうか。バドラーバーフは、既に述べたように五支をはじめとする様々なタイプの論証式を提示している。彼は喩例のない論証を承認しているのだろうか、また複数種の論証式を述べる意図はどこにあるのだろうか。この点に関しては、次の彼の言葉が有用であろう。

ジナの言葉は完全に成立している。あるときには例示が述べられる。またある時には、
聴者に応じて証因が述べられるべきである。³⁰

バドラーバーフにとって、ジナの言葉(すなわち聖典)は完全に成立している。つまり、本人が聖典の注釈を造る以前から全く正しいものとして存在している。このことはまず彼にとって大前提のことである。バドラーバーフにとっては「不殺生というダルマが最高の吉祥なるもの」であることは自明であり、全く間違いのないことに他ならない。彼は、この「完全に成立している」内容を他者に説明するのである。上記の彼の言葉によれば、「例示」のみ、「証因」のみなど、どのような形であれ、聖典を聴く(読む)者に応じてその内容を理解せしめる事こそが目的なのであろう。

したがってバドラーバーフにとっては、例示/喩例のみの論証式、証因のみの論証式が正しい論証であるか否かという問題は生じない。彼の意図は、聖典を聴く(読む)者を理解せしめることにあり、その相手に合わせて論証を積み上げれば良い。「証因」「根拠」のみで聖典を理解可能な者もいれば、「喩例」や「結論」支分が必要な者もいるであろう³¹。しかも、論証する内容の正しさは、彼にとっては論証が開始される前から自明であるので、バドラーバーフはある場合には「例示」のみ、ある場合には「証因」のみという論証を認めているのである。さらに彼は次のように言う。

ある場合には五支分、あるいはある場合には十支分というように、[支分の言明は]絶対的に制限されているわけではない。³²

これによれば、五支分や十支分、さらには上記に示した例示のみ、証因のみなどの論証式の支分は絶対的に定まっているわけではなく、任意である³³。つまり、論証式の支分の数は、論証する相手に応じていくつであろうと構わないということになる。この任意性について注釈書『ダシヤヴァイカーリカ・チュールニ』は次のように述べている。

この論書もしくは別の諸論書においては、ある時には聖典だけが述べられる。ある時は

証因を伴って[聖典が述べられる]。あるいは聖典と証因と喩例が、あるいは適合を伴って主張が[述べられる]。あるいは証因と喩例と適合と結論によって聖典の言葉が考察される。あるいは五支によって、あるいは十支によって[聖典の言葉が考察される]。³⁴

この言明に見られる「論書」(pagaṛaṇa / prakaraṇa)とは、まさしく『ニルユクティ』や『チュールニ』などの聖典注釈そのものを指す。聖典注釈者たちは、自著の中で時には聖典の言葉だけを示すこともあり、またそれに付随して証因や喩例などの支分を駆使して説明を施すこともある。つまり、注釈者にとってまず聖典の言葉は本来的に正しいものであり、その言葉を他者に対して注解するために様々な論証式が使用されていることになる。

上記に見た通り、ジャイナ教における論理的思考は、聖典注釈文献の作成に大きく関連している。聖典注釈そのものが論理にあふれた書物であり、論理学導入の目的は聖典の言葉を注解することに他ならない。ジャイナ教論理学は、比喩的な例え話も含めて、いわば聖典注釈の肉付けをなし、聖典理解の扶助という役割を果たしているのである。

4. 結 語

以上の考察から、次のことが結論づけられる。

- ・白衣派ジャイナ教の伝統的認識論において、推理は「五知」とは異なり、解脱に至る手段(mokṣamārga)とは考えられていない。
- ・聖典の段階では、他学派の影響の元に論理的思考が断片的に取り入れられるが、その目的や役割は不明瞭である。
- ・聖典注釈特にバドラバーフの『ニルユクティ』では、論理学は聖典の注解を目的として注釈文献内に駆使されている。
- ・ジナ言葉(聖典の言葉)は他者に説明する以前から「正しい」ものであり、聖典注釈作成の過程で様々な論証形式が任意に選択された。
- ・聖典注釈内での論理学は、例え話(寓話、古譚、伝説など)をも含め、聖典注釈を肉付けし、他者の聖典理解を助ける役割を果たしている。

略号および参考文献

- ADS : *Anuyogadvārasūtra* : Muni Jambuvijaya (ed.), *Anuyogadvārasūtram*. 2Vols., Jaina Āgama Series No. 18 (1,2), Bombay : Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1999, 2000.
- ĀN : *Āvaśyakaniryukti* (Bhadrabāhu) : Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad-Āvaśyakasūtram*. 4Vols., Āgamodaya Samiti Series nos. 1-4, Mehesana, 1916-17.
- Balbir, Nalini
- 1990 "Stories from the Āvaśyaka commentaries." *The Clever Adulteress and Other Stories*. Edited by Phyllis Granoff, Ontario, pp.17-74.
- 1993 *Āvaśyaka-Studien : Introduction generale et Traductions*. Alt- und Neu-Indische Studien 45-1, Stuttgart : Franz Steiner Verlag.
- BhS : *Bhagavatisūtra* : Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad Bhagavatisūtram*. 3Vols., Āgamodaya Samiti Series nos.12, 13, 14, Mehesana, 1918-21.
- CS : *Carakasamhitā* (Agniveśa) : Vaidya Jādavaji Trikamji (ed.), *The Charakasamhitā of Agniveśa, revisited by Charaka and Dṛidhabala with the Āyurveda-Dīpikā Commentary of Charakapāṇidatta*. Bombay : Nirnaya Sagar Press, 1941.
- DVC : *Daśavaikālikacūrṇi* (Agastyasiṃha) : Muni Puṇyavijaya (ed.), *Sayyambhava's Dasakāliyasuttaṃ with Bhadrabāhu's Niryukti and Agastyasiṃha's Cūrṇi*. Prakrit Text Society Series no.17, Ahmedabad : Prakrit Text Society, 1973.
- DVN : *Daśavaikālikaniryukti* (Bhadrabāhu) : See DVS.
- DVV : *Daśavaikālikavṛtti* (Haribhadra Sūri) : See DVS.
- DVS : *Daśavaikālikasūtra* (Śyambhava) : Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrī-Daśavaikālikasūtram*. Devacandra Lālchai Jainapustakodhāra Fund Series no. 47, Bombay, 1918.
- 藤永 伸
- 1985 「アランカのプラマーナ論」『印度学仏教学研究』第34巻第1号、pp.58-62.
- Malvania, Dalsukh
- 1949 *Nyāyāvatāravārtikavṛtti of Śrī Śānti Sūri*. Singhi Jain Series 20, Bombay : Singhi Jain Śāstra Śikṣāpīṭha, 1949.
- NS : *Nyāyasūtra* (Gautama) : Tāranātha Nyāyatarkatīrtha and Amarendramohan Tarkatīrtha (eds.), *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Mīśra's Tātparyāṭikā & Viśvanātha's Vṛtti*. Calcutta Sanskrit Series nos. 18, 19, Calcutta, 1936-44. (Reprint, Kyoto : Rinsen Book Co., 1982.)

- Puṇyavijaya, M., Malvania, D. and Bhojak, A. M.
 1968 *Nandisuttam and Aṇuyogaddārāṇi*. Jaina Āgama Series no.1, Bombay : Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya.
- Solomon, E. A.
 1976 *Indian Dialectics : Methods of Philosophical Discussion*. Vol.1, Ahmedabad : B. J. Institute of Learning and Research.
- TAS : *Tattvārthasūtra* (Umāsvāti) : Hiralal Rasikdas Kapadia (ed.), *Tattvārthādhigamasūtra, Part I*. Devacandra Lālbhai Jainapustakodhāra Fund Series no.67, Bombay, 1926.
- UAS : *Uttarādhyayanāsūtra* : Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmaty Uttarādhyayanāni*. 3Vols., Devacandra Lālbhai Jainapustakodhāra Fund Series nos. 33, 36, 41, Bombay, 1916-17.
- 宇野 惇
 1965 「ジャイナ教知識論の一考察—「認識」の概念の発展—」『密教学』第1号、pp.168-190.
- VĀBh : *Vīṣeṣāvaśyakabhāṣya* (Jinabhadra Gaṇi) : Dalsukh Malvania (ed.), *Ācārya Jinabhadra's Vīṣeṣāvaśyakabhāṣya with Auto-commentary*. 3Vols., L. D. Series, nos. 10, 14, 21, Ahmedabad, 1966-68.
- VĀBhSV : *Vīṣeṣāvaśyakabhāṣyasvopajñāvṛtti* (Jinabhadra Gaṇi) : See VĀBh.
- Vidyabhusana, Satis Chandra
 1920 *A History of Indian Logic : Ancient, Mediaeval and Modern Schools*. Calcutta. (Reprint, Delhi : Motilal Banarsidass, 1988.)

【註】

* 本稿は、筑紫女学園大学・短期大学部平成19年度特別研究助成費（一般研究）による研究成果の一部である。なお共同研究者である江崎公児博士からは数々の助言と示唆を頂いた。ここに謝意を表したい。

¹ UAS 23.33 : aha bhava painnā u mukkhasabbhūyasāhaṇā / nāṇaṃ ca daṃsaṇaṃ ceva carittaṃ ceva nicchae // [Skt. : atha bhavet pratijñā tu mokṣasadbhūtasādhanā / jñānaṃ ca darśanaṃ caiva cāritraṃ caiva nīscaye //]

² TAS 1.1 : samyagdarśanañānacāritrāṇi mokṣamārgaḥ //

³ UAS 28.3-4 : nāṇaṃ ca daṃsaṇaṃ ceva carittaṃ ca tavo tahā / eyaṃ maggam aṇuppattā jīvā gacchaṃti suggaiṃ // tattha paṃcavihaṃ nāṇaṃ suaṃ ābhiñibohiyaṃ / ohīyanāṇaṃ taiyaṃ maṇānāṇaṃ ca kevalaṃ // [Skt. : jñānaṃ ca darśanaṃ caiva cāritraṃ ca tapo tathā

/ enaṃ mārgam anuprāptā jīvāḥ gacchanti sugatim // tatra pañcavidhaṃ jñānaṃ śrutam ābhiniḥbodhikam / avadhijñānaṃ manojñānaṃ ca kevalam //]

⁴ BhS 5.4.193 : se kiṃ taṃ pramāṇe, pramāṇe cauvihe paṇṇatte, taṃjahā --- paccakkhe aṇumāṇe ovamme āgame / [Skt. : atha kiṃ tad pramāṇam, pramāṇaṃ caturvidham prajñaptam, tad yathā --- pratyakṣam anumānam aupamyam āgamaḥ /]

⁵ ADS 436 : se kiṃ taṃ ṇāṇaguṇappamāṇe, ṇāṇaguṇappamāṇe cauvihe paṇṇatte / taṃjahā --- paccakkhe aṇumāṇe ovamme āgame / [Skt. : atha kiṃ tad jñānaguṇapramāṇam, jñānaguṇapramāṇaṃ caturvidhaṃ prajñaptam, tad yathā --- pratyakṣam anumānam aupamyam āgamaḥ /]

⁶ Cf. NS 1.1.3 : pratyakṣānumānopamānaśabdāḥ pramāṇāni /

⁷ たとえば、『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストラ』では、知覚を「感官による知覚」と「感官によらない知覚」に分類し、前者に五つの感官（聴覚、視覚、嗅覚、味覚、触覚）に基づく知覚、後者に五知のうちの直観知、他心知、独存知を配当している。See ADS 437-9 : se kiṃ taṃ paccakkhe, paccakkhe duvihe paṇṇatte / taṃjahā --- iṃḍiyapaccakkhe ya ṇoiṃḍiyapaccakkhe ya / se kiṃ taṃ iṃḍiyapaccakkhe, iṃḍiyapaccakkhe paṃcavihe paṇṇatte / taṃjahā --- soiṃḍiyapaccakkhe cakkhurīṃḍiyapaccakkhe ghāṇiṃḍiyapaccakkhe jibbhiṃḍiyapaccakkhe phāsiṃḍiyapaccakkhe / se taṃ iṃḍiyapaccakkhe / se kiṃ taṃ ṇoiṃḍiyapaccakkhe, ṇoiṃḍiyapaccakkhe tivihe paṇṇatte / taṃjahā --- ohiṇāṇapaccakkhe maṇapajjavaṇāṇapaccakkhe kevalaṇāṇapaccakkhe / se taṃ ṇoiṃḍiyapaccakkhe / se taṃ paccakkhe / [Skt. : atha kiṃ tat pratyakṣam, pratyakṣam dvividhaṃ prajñaptam / tad yathā --- indriyapratyakṣam ca noindriyapratyakṣam ca / atha kiṃ tad indriyapratyakṣam, indriyapratyakṣam pañcavidhaṃ prajñaptam / tad yathā --- śrotrendriyapratyakṣam cakṣurindriyapratyakṣam ghrāṇendriyapratyakṣam jihvendriyapratyakṣam sparśendriyapratyakṣam / tad etad indriyapratyakṣam / atha kiṃ tad noindriyapratyakṣam, noindriyapratyakṣam trividhaṃ prajñaptam / tad yathā --- avadhijñānapratyakṣam maṇaparyāyajñānapratyakṣam kevalajñānapratyakṣam / tad etad noindriyapratyakṣam / tad etat pratyakṣam /]

⁸ See VĀBh 95 : egaṃtena paroḁkkaṃ liṃgiyaṃ ohāiyaṃ ca paccakkaṃ / iṃḍiyamaṇobhavaṃ jaṃ taṃ saṃvavahārapaccakkaṃ // [Skt. : ekāntena paroḁkaṃ laiṅgikam avadhyādikaṃ ca pratyakṣam / indriyamanobhavaṃ yat tat saṃvyavahārapratyakṣam //]. (「証相（目印）に基づく知は絶対的に間接知であり、[感官などに依存しない] 直観知など（直観知・他心知・独存知の3つ）は[絶対的に] 直接知である。感官・マナスによって生じる知は世間の直接知である。』)

⁹ アカランカによる知とプラマーナの分類については、藤永 [1985] を参照されたい。

¹⁰ See TAS 1.13 : matiḥ smrṭiḥ saṃjñā cintābhiniḥbodha ity anarthāntaram //

¹¹ ADS 440 : se kiṃ taṃ aṇumāṇe, aṇumāṇe tivihe paṇṇatte / taṃ [jahā] --- puvvavaṃ

sesavaṃ diṭṭhasāhammavaṃ / [Skt. : atha kiṃ tad anumānam, anumānam trividhaṃ
prajñaptam / tad yathā pūrvavac cheṣavad dṛṣṭasādharmyavat /]

¹² 『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストラ』とこれら他学派の作品との前後関係については、確定的な証拠に欠けており、不明な点が多い。同書は、聖典知の分類において数々の固有名詞を列挙しており、その中には'saṭṭhitaṃtam'(Skt. : Śaṣṭhitantra) という語が見られる (ADS 49)。ただしその中には'māḍharaṃ'(Skt. : māḍhara) という語もあり、サーンキヤ学派の『マータラ注』を示唆するが、もし『マータラ注』をかなりの後代(6世紀以降)の作品とするならば、ジャイナ教内の伝統と矛盾を来す(バドラバーフは『アヌヨーガ』に言及している)。この点を鑑みて、Puṇyavijaya, etc. [1968 : Intro. 70-72] は、'saṭṭhitaṃtam'および'māḍharaṃ'を後代の付加と見なし、『アヌヨーガ』を紀元 300年以前と見なしている。さらに、Puṇyavijaya, etc.[1968 : Intro. 72] は、『アヌヨーガ』に見られるプラマーナの分類は、ニャーヤ・ヴァイシェーシカ学派、『マータラ注』、『チャラカ・サンヒター』、『方便心論』などに基づいたものではないと断言するが、その根拠は薄弱であると思われる。『アヌヨーガ』を紀元300年頃と考えたとしても、少なくとも、『ニャーヤ・ストラ』、『ヴァイシェーシカ・ストラ』、『チャラカ・サンヒター』、『シャシュティ・タントラ』はそれ以前に成立していると考えられるからである。

¹³ See CS3.8.16 : bhiṣak bhiṣajā saha saṃbhāseta / (「医者は医者と討論をすべきである。」)。

¹⁴ See NS 1.1.1 : pramāṇa-prameya-saṃśaya-prayojana-dṛṣṭānta-siddhāntāvayava-tarka-nirṇaya-vāda-jalpa-vitaṇḍā-hetvābhāsa-chala-jāti-nigrahasthānāṃ tattvajñānān niḥśreyasādhigamaḥ /

¹⁵ 『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストラ』における推理の例と分類については、本号掲載の江崎公兎論文を参照されたい。

¹⁶ バドラバーフの年代論には未だ確定的見解はない。Vidyābhūṣaṇa[1920 : 164-165] は紀元後375年前後とし、Puṇyavijaya, etc. [1968 : Intro. 44] は『アーヴァシュヤカ・ニルユクティ』が作成されたのはヴィクラマ暦562年(紀元後505年頃)とする。いずれにせよ、下限はジナバドラ(505-609 ca.)以前であり、バドラバーフが仏教僧ディグナーガ(480-540 ca.)を知らなかったことは確かであろう。

¹⁷ ĀN 84-86 : āvassagassa dasakāliassa taha uttarajjhamāyāre / sūyagaḍe nijjuttim vucchāmi tahā dasāṇaṃ ca // kappassa ya nijjuttim vavahārasseva paramaṇiṇaṇassa / sūriapaṇṇattie vucchaṃ isibhāsiāṇaṃ ca // etesiṃ nijjuttim vucchāmi ahaṃ jīṇovaeseṇaṃ / āharaṇaheukāraṇapayanivahaṇaṃ samāseṇaṃ // [Skt. : āvaśyakasya daśavaikālikasya tathā uttarādhyayācārayoḥ / sūtrakṛte niryuktiṃ vakṣye tathā daśānāṃ ca / kalpasya ca niryuktiṃ vyavahārasyaiva paramaṇiṇaṇasya / sūryaprajñapṭeḥ vakṣye ṛṣibhāṣitānāṃ ca // eteṣāṃ niryuktiṃ vakṣye 'haṃ jinopadeśena / āharaṇaheṭukāraṇapadanivahāṃ etāṃ samāseṇa //]

¹⁸ DVN 52 : nāyam udāharaṇaṃ tia diṭṭhamtovama nidarisaṇaṃ taha ya / egaṭṭhaṃ taṃ duvihaṃ cauvvihaṃ ceva nāyavvaṃ // [Skt. : jñātam udāharaṇam iti ca dṛṣṭānta upamā nidarśanaṃ tathā ca / ekārthaṃ tad dvividhaṃ caturvidhaṃ caiva jñātavyam //]

¹⁹ ニャーヤ学派では、よく知られた一般的な意味での「実例そのもの」を 'dṛṣṭānta'、論証式の「喩例支」を 'udāharaṇa' という語で示し、両語を使い分けている。NSではまず 1.1.25 に「世間の人と学者がそのことに関して理解を同じくするようなもの」と実例 (dṛṣṭānta) を定義し、1.1.36 において「喩例とは、論証されるべきものと性質を共通にしているので、それ (論証されるべきもの) の [もう一つの] 性質をも有する実例である。」と述べられている。つまり、'dṛṣṭānta' は実例そのものであり、その実例の中でも「論証されるべきものの属性を持つもの」が 'udāharaṇa' と呼ばれる。See NS1.1.25 : laukikaparīkṣakāṇāṃ yasminn arthe buddhisāmyaṃ sa dṛṣṭāntaḥ / ; 1.1.36 : sādhyasādharmyāt taddharmabhāvi dṛṣṭānta udāharaṇam /.

²⁰ 'jñāta' という語が「場」を意味しうことは、次のハリバドラによる解釈に従った。See DVV on DVN 49 : jñāyate 'smin sati dārṣṭāntiko 'rtha iti jñātam, adhikaraṇe niṣṭhāpratyaayaḥ /

²¹ ハリバドラはこの『ニルユクティ』の 'uvamā' という語を類推 (upamāna) と解釈している。See DVV on DVN 49 : upamiyate 'nena dārṣṭāntiko 'rtha ity upamānam /

²² ジャイナ教の物語文学の研究は、Ernst Leumann によって開始されたが、プラークリット、サンスクリットを問わず、その殆どが聖典注釈文献を素材としている。たとえば、Balbir[1990, 1993] を参照されたい。

²³ DVN 51cd : heū cauviho khalu teṇa u sāhijjāe attho // [Skt. : hetuś caturvidhaḥ khalu tena tu sādhyate arthaḥ /]

²⁴ See DVV on DVN51 : tena punar hetunā sādhyārthāvinābhāvabalena sādhyate niṣpādyate jñāpyate vā arthaḥ pratijñārtha iti gāthārthaḥ /.

²⁵ 『ダシャヴァイカーリカ・ニルユクティ』に示される論証式の支分については、Vidyābhūṣaṇa [1920 : 165-167], Malvania[1949 : Intro. 76-77, 91-102], Solomon[1976 : 51-61, 403-404] などを参照されたい。

²⁶ ここに提示する五支の論証式は以下の『ニルユクティ』から再構成した。See DVN 89-91 : dhammo guṇā ahiṃsāiyā u te paramamaṅgala painnā / devāvi logapujjā paṇaṇamaṃti sudhammam ii heū // diṭṭhaṃto arahamaṃtā aṇagārā ya bahavo u jīṇasīsā / vattaṇuvatte najjai jaṃ naravaṇo 'vi paṇamaṃti // uvasaṃhāro devā jaha taha rāyāvi paṇamai sudhammaṃ / tamhā dhammo maṅgalam ukkiṭṭham iha a nigamaṇaṃ // [Skt. : dharmāḥ guṇā ahiṃsādayaḥ tu te paramamaṅgalaṃ pratijñā / devā api lokapūjyāḥ praṇamanti sudharmāṇam iti hetuḥ // dṛṣṭānto 'rhanto 'nagārās ca bahavas tu jīnaśiṣyāḥ / vṛttānuvṛtto jānāti yan narapatayo ' pi praṇamanti // upasaṃhāro devā yathā tathā rājāpi praṇamati sudharmāṇam / tasmād dharmo maṅgalam utkrṣṭam iti ca nigamaṇam //]

²⁷ DVS 1 : dhammo maṅgalam ukkiṭṭhaṃ ahiṃsā saṃjamo tavo / devāvi taṃ namaṃsaṃti jassa dhamme sayā maṇo // [Skt. : dharmo maṅgalam utkrṣṭam ahiṃsā saṃyamas tapaḥ / devā api taṃ namasyanti yasya dharme sadā manaḥ //]

²⁸ VĀBhSV on VĀBh 1074 : kāraṇam anyatra hetur eva / iha tu hetoḥ sākṣād abhidhānāt

kāraṇam upapattimātram, yathā nirupamasukhaḥ siddhaḥ, jñānānābhādhaprakarṣāt, nirupamasukhapratijñānāc ca nehodāharaṇam asti / dr̥ṣṭās ca prakṣṣṭajñānānābhādhāḥ paramasukhino munayaḥ / ata eva kevalajñānāsarīrānābhādhaprakarṣād anvayam antareṇāpi nirupamasukhopapattiḥ siddhānām gamyate /

²⁹ ジナバドラの作品では、ディグナーガの断片と思われる表現が見られ、また「自己のための推理・他者のための推理」という概念もが承認されている。彼の論理学に関する見解はディグナーガと極めて高い親近性を持っており、ディグナーガから大きな影響を受けていたと思われる。ジナバドラとディグナーガの関係については別稿を準備中である。

³⁰ DVN 49 : jīṇavayaṇaṃ siddhaṃ ceva bhaṇṇae katthai udāharaṇaṃ / āsajja u soyāraṃ heu 'vi kaḥiṃci bhaṇṇejjā // [Skt. : jīnavacanaṃ siddhaṃ caiva bhaṇyate kutracid udāharaṇam / āsṛitya tu śrotāraṃ hetur api kvacid bhaṇyeta //]

³¹ ハリバドラは「鋭敏な知を持つ者」「普通の知を持つ者」「愚かな知を持つ者」などに「[[聖典を]聴く者](śrotṛ) を分け、前二者を「証因の提示だけで理解が得られる」と説いている。See DVV on DVS49 : paṭudhiyo hetumātropanyāsād eva prabhūtārthāya gatiḥ bhavati, madhyamadhīs tu tenaiva bodhyate, na itara ity arthaḥ /

³² DVN 50ab : katthai paṃcāvayaṇaṃ dasahā vā savvahā na paḍisiddhaṃ / [Skt. : kvacit paṃcāvayaṇaṃ daśadhā vā sarvathā na pratiśiddham /]

³³ この任意性に基づいて、Malvaniaは『ダシヤヴァイカーリカ・ニルユクティ』には次のような論証式のパターンが提示されていると考えている。See Malvania [1949 : Intro. 77].

(1) pratijñā / udāharaṇa

(2) pratijñā / hetu / udāharaṇa

(3) pratijñā / hetu / dr̥ṣṭānta / upasaṃhāra / nigamana

(4) pratijñā / pratijñāviśuddhi / hetu / hetuviśuddhi / dr̥ṣṭānta / dr̥ṣṭāntaviśuddhi / upasaṃhāra / upasaṃhāraviśuddhi / nigamana / nigamanaviśuddhi

(5) pratijñā / pratijñāviśuddhi / hetu / hetuviśuddhi / vipakṣa / pratiśedha / dr̥ṣṭānta / āśaṃkā / tatpratiśedha / nigamana

³⁴ DVC on 23, p.20 : ettha vā pagaraṇe pagaraṇaṃtaresu vā kayāi āgamamettam eva kaḥijjati, kadādi sahetukaṃ, āgama-heu-diṭṭhaṃtā vā, ahavā sopasaṃhārā painṇā, heu-diṭṭhaṃtovasaṃhāra-ṇigamaṇehiṃ vā ṇirūvijjati āgamavayaṇaṃ paṃcahiṃ dasahiṃ vā / [Skt. : atra vā prakaraṇe prakaraṇāntareṣu vā kadācid āgamamātram eva kathyate, kadācit sahetukam, āgamahetudr̥ṣṭāntāḥ vā, atha vā sopasaṃhārā pratijñā, hetudr̥ṣṭāntopasaṃhāranigamanair vā nirūpyate āgamavacanaṃ paṃcabhir daśabhir vā /]

(うの ともゆき：日本語・日本文学科 准教授)